

インドの祖霊崇拜／ブータをめぐって

河野 亮 仙

ここでは、1. 南インドの祖霊崇拜、英雄崇拜、神の概念の問題をフィールド・ワークと文献の双方から論究し、2. その概念がまた、北インドの辺境においても有効であることを示す。3. そして、それはブラフマニズムの普及する以前のインドの民俗宗教においてかなり共通する概念ではないかと推察する。

1. 南インドの祖霊と神

Kathleen Gough の調査によるとケーララ州中央部には三種類の祖霊崇拜のスタイルが観察される。

a) サンスクリット系のバラモニックな父方を祀る祖霊祭。b) 非サンスクリット系の母系制のナイル (Nayar) の母方の祖先を祀る祖霊祭。c) 非サンスクリット系で一族の家系には属さないもの (alien ghost) を祀る祭儀。alien ghost とはナイルの大家族制の家 (taravād) に仕えていた農奴やメイド、あるいは、近所で変死した異邦人の霊で、pretam, piśāca, bhūta と呼ばれ、彼らを祟らないようにと供養する特殊な祭儀が催される。

b) や c) の供養によって、疫病を免れ、家畜の増殖や豊作、一家の健康や村の繁栄が約束される。また、alien ghost が地方神として崇拜されるようになり、やがて、もっと大きなサンスクリット系の神格とも統合される。

c) の祭儀は、ケーララ州北部、カルナータカ州南部において特に発達し、独特なおどろおどろしい祭礼の中で鬼神が祀られる。これは、古代タミルの詩文学であるサンガムの文献群 (1~6 世紀) に描かれる祭儀の末裔と思われる。ケーララ州北部ではテイヤム、カルナータカ州ではブータと呼ばれる。コーイル (kōvil)、カーブ (kāvu)、ブータ・スターナ (bhūta-sthāna) と呼ばれる祠、あるいは寺院において、毎年、2、3 月を中心とした数カ月の間に祭礼として供養が行なわれる。

ケーララではトータム (tōttam)、カルナータカではパッダーナ (paddāna) と呼ばれる神の来歴を語る祭文によって勧請した鬼神・精霊・獣神がシャーマン・ダンサー (アウト・カーストの持定の家系の者) にとりつき、激しい舞いを舞った後、村人にお告げをし、祝福して帰る。こうして村のもめ事をおさめ、村人の健康や

繁栄を約束する。

南インドの民俗でも日本の御霊のように、祖霊や不慮の死を遂げた英雄、産褥で死んだ女などは丁寧に祀らないと祟ることがあるとされる。そうした身近な人物が、やがて、地方神の生れ変わりであると同一視されて、最後にはバラモン系の大きな神格と習合してゆく。バガヴァティー女神の名のもと、不幸な死に方をした女、地母神、疱瘡神、蛇神等様々な神格が統合され、ヒンドゥー教でいうカーリー女神、すなわち、シヴァ神妃と習合していくのが代表的な例である。

2. グジャラート州のブータとヒーロー・ストーン

ケーララとカルナータカの州境からインド亜大陸の西の海岸線を千キロ以上北上したグジャラート州にもよく似たブータのカルトがあることが報告されている。産褥で死んだ女は *vetra, vetri* と呼ばれ、不慮の死を遂げた男、英雄や狂人、シャーマン等は *bhūt* として木偶に祀られるカルトがある。

Haku Shah の調査した Surat 地方のある村では、普通は、漬物石くらいの大きさのペンキを塗った石 (*khatri*) に祖霊を祀り込む。ところが、異常死者や曰く因縁のある者は、占いによって数十センチくらいの大きさの木偶に祀り込むことを決める。英霊とその木偶の両者をブータと呼ぶ。彼らは、普通の祀り方をすると、村を荒し、村人に危害を加えると信じられる。

グジャラートの他の地区では、一メートル半の浮き彫りの板碑に祀ったり、ヒーロー・ストーンと総称される顕彰碑的な石碑に祀る伝統を持つ。このヒーロー・ストーンについては、南インド古典詩文学においても記述があり、*natukal* と呼ばれる石に英雄の霊を祀り込んで、羊の首をはね、血を捧げて供養したことが分かっている。

3. このヒーロー・ストーン、サティー・ストーン、またはメモリアル・ストーンのカルトは、インド各地に広範囲に見られるものである。そして、妻が夫に従って殉死する風習は今日も北インドで行なわれ、日本の新聞をも賑わすが、祟らないようにその場に祠を建て、次第に村の女としての個性をなくし、サティー女神として崇拜され、村人の悩みごとを解決し、病気を治す神となる。ダーキニーも、産褥で死んだ女の霊と説明することがあり、祀らないと祟る鬼神だ。

つまり、先に南インドの神の概念が祖霊や英霊と密接に結びついていたことを示したが、これは現代のインド各地においても見られる民俗的な神の概念である。インドはサンスクリット化によって同じ文化の色を持つようになったが、ブラフマニズム到来前のインドにおいても、かなり、共通したカルトが各地で行な

われていたのではないかと筆者は推察する。

参考文献

Martha Bush Ashton,

“Spirit Cult Festivals in South Kanara” in *The Drama Review*, Vol.23, Number 2, 1979. New York University, School of the Arts.

Eberhard Fischer and Haku Shah,

“Vetra ne khamba / Memorials for the Dead.” Gujarat Vidyapith, 1971.

E. Kathleen Gough,

“Cults of the Dead Among the Nayars” in *Traditional India* ed by Milton Singer. Jaipur : Rawat Rublications, Reprinted in 1975.

George L. Hart,

“The Poems of Ancient Tamil / Their Milieu and Their Sanskrit Counterparts.” California : University of California Press, 1975.

S. Settar and G. D. Sontheimer,

“Memorial Stones” Institute of Indian Art History, Karnatak University, 1982.

U. P. Upadhyaya and S. P. Upadhyaya,

“Bhuta Worship / Aspects of a Ritual Theatre” Udupi : M. G. M. College, 1984.

河野亮仙

「南インドのシャーマン」『印度学仏教学研究』第三十三卷二号 昭和60年

「南インドのヒンドゥー教」『大正大学大学院研究論集』第十号 昭和61年

「インドの儀礼絵画」『密教図像』第五号 昭和62年

「南インドの神概念／テイヤムとプータ」『宗教研究』275号 昭和62年

「カタカリ万華鏡」平河出版社 昭和六十三年

<キーワード> 祖霊崇拜, ナイル, プータ

(大正大学総合仏教研究所研究員)

— 新刊紹介 —

斎藤昭俊・李載昌編

『東洋仏教人名事典』

A 5 版・427頁・定価8800円
 新人物往来社・平成元年2月10日